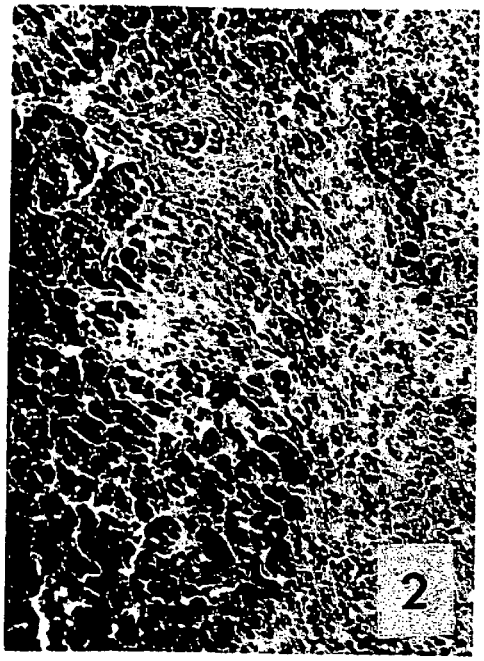
犬の多発性心筋線維化

農林省家畜衛生試験場北陸支場出題　第15回獣医病理学研修会標本 No.222



症例は新潟県柏崎市で飼育されていた，雄のシェパード犬，6ヵ月齢である。夕刻突然死亡していたのを畜主が発見した。

肉眼的所見：心筋の心内膜側より，中間部にわたって小豆大のほぼ円形の赤色斑が広汎に散在する。これらの赤色斑に混在して，米粒大の灰白色斑を認める。出現状態は，心房においては不明瞭であるが，左右の心室，特に左心室壁に顕著である。心内膜に直接みられる変化はなく，弁膜，腱索にも変化はない。肺は水腫性で，一部肝変化病巣がある。

組織学的所見：心内膜は局所的に炎性水腫をおこしているが，全体として著しい変化はない。心外膜にも変化は認められない。冠状動脈には血栓形成はなく，動脈硬化症も認められない。少数の冠状動脈肢にのみ，内皮細胞の腫大と中膜肥厚，周囲結合組織の増生と粗鬆化がある(写真1)。全体に線維化が著しく，結合組織の増生が多発している(写真2)。心筋の筋細胞質に，微細顆粒状に，心筋線維の横紋に沿うように，心筋線維に平行に，および細胞全体に，ヘマトキシリン（以下Hと略す）濃染物質がみられる。細胞質全体がHに濃染する物質は，PAS陽性，Sudan Ⅲ および Ⅳ 陰性，Alcian blue 陽性，Alizarin 陽性，Kossa 陽性，Azan で紫紅色および帯橙色に染まる。H濃染部は周囲を結合組織によってとりかこまれているものもある。これらの部位には続発性融解壊死および空胞変性がみられる。結合組織の増生している部位には血管の増生および拡張がみられる。血液を充満させている血管もあり，そうでない空虚なものもある出血が主体の部位もある。一部の出血病変部に近接して少量ながらリンパ球および好中球の浸潤と淡明核細胞の浸潤が主体を占める部位がある。

病変の様相は多種にわたり，慢性変化と同時に急性変化もあり実質性心筋炎としたい変化がみられた。心筋の変性は石灰変性と同時に塩基性粘液多糖類変化も疑われた。しかしながら全体として炎症反応は少なく，病原関与も薄い。年齢などを考えあわせると先天的要因による冠不全に伴う心筋硬塞と思われた。組織診断名としては，多発性心筋線維化とした。